

疾患別PEG適応①

パーキンソン病

パーキンソン病(症候群)の診断と治療、経過 進行度合いによる胃ろうの適応について

国際医療福祉大学 医学部 医学教育統括センター

荻野美恵子

今回から疾患別の胃ろう造設の適応について解説していきます。初回である第1回目はパーキンソン病(症候群)についてです。パーキンソン病(症候群)の診断や治療、経過をもとに病態の進行度に合わせて胃ろう造設の適応をどう考えていくべきか解説します。



① パーキンソン病(症候群)の疾患概念

パーキンソン病は、高齢者になるほど多くみられる、体が徐々に思うように動かせなくなる病気です。

手足のふるえ(振戦)やこわばり(固縮)、体の動きがゆっくりになる(動作緩慢)ことが特徴で、進行するとバランスを崩したときに立て直すことが下手になる(姿勢保持障害)ため、転びやすくなります。これら運動症状のほかにも、非運動症状といわれる自律神経症状(便秘や頻尿、起立性低血圧)、うつ状態、意欲の低下、睡眠障害(レム睡眠異常、日中の過眠)、レストレスレッグ症候群(夜を起す)を生じます。

原因は特定できていませんが、脳の中の体をスムーズに動かす神経(中脳の黒質ドパミン神経細胞)にαシヌクレ

インというたんぱく質が凝集して溜まってしまい、ドパミン神経細胞が減っていくことがわかっています。60歳以上では100人に1人の頻度で見られる、難病の中では比較的頻度の多い疾患で、約5%は遺伝性です。

パーキンソン病に似た症状を示すパーキンソン症候群には多系統萎縮症・MSA (multiple system atrophy) (特に黒質線条体変性症<striato-nigral degeneration: SND>)、進行性核上性麻痺(progressive supranuclear palsy: PSP)、皮質基底核変性症(corticobasal degeneration: CBD)などがあります。これらの原因も不明ですが、パーキンソン病と異なり家族性発症はまれです。

② パーキンソン病(症候群)の診断

発症は60〜70代であり、病歴および診察所見にて疑い、鑑別診断のために頭部

MRI、DATスキャン、MIBG心筋シンチグラムなどを行います。初期の

パーキンソン症候群は、パーキンソン病と鑑別が難しい場合もあります。

症状はふるえ、動作緩慢、歩行障害などですが、パーキンソン病であれば、抗パーキンソン病薬が症状改善に

有効であり、パーキンソン症候群では、パーキンソン病ほど著効はしないので、治療への反応をみて診断を考えることもあります。

パーキンソン病患者の生活の質・人性の質を よくするための胃ろうの選択

③ パーキンソン病(症候群)の治療

パーキンソン病であれば、減少してしまったドパミンを補うL-dopa剤を中心とする各種の抗パーキンソン病薬による薬物療法や、リハビリテーションなどの非薬物療法が有効です。

内服薬以外では、脳の中に電極を埋め込む手術をして直接脳を刺激して動きをよくする脳深部刺激治療(Deep Brain Stimulation: DBS)や、胃ろうを造設し、腸までの管を入れることで

ポンプを使って持続的に「L-dopa」を注入するレボドパ・カルビドパ配合経腸用液(商品名デュオドーパ®配合経腸用液)治療などもあります。いずれも完全に治す治療ではなく、足りないものを補充する治療です。また、昨年より京都大学にて、iPS細胞由来ドパミン神経前駆細胞を用いた医師主導

治療も開始されました。パーキンソン症候群は、パーキンソン病ほど治療薬が効かないですが、多く用いることで多少効果があることもあります。そのほかリハビリテーションをはじめとした対症療法を行います。

長さは50cmと75cmの2種類

PDN ショップにて販売中! <http://pdnshop.com/>

PDN ブラシ

概略仕様

芯線: SUS304、シングルスパイラル
ブラシ材: ナイロン L: 500mm 750mm

価格

1本 2,315円 消費税・送料別

製造

NPO 法人 PDN (Patient Doctors Network)
TEL 03-5859-5518 FAX 03-5859-5519

④ パーキンソン病(症候群)の経過

パーキンソン病は、抗パーキンソン病薬の調整により、約10年は通常の生活ができる程度にコントロール可能です。しかし、進行に伴い投薬量および種類は徐々に増え、おおよそ10年程度経過すると、投薬時間に相応して十分に薬の効果がある時と、不十分な時が出てくる(ウェアリングオフ)などコントロールが難しくなりますが、それでもほぼ介護なしに生活できることが多いです。

その後、幻覚等の副作用が出やすくなると、投薬量の増量も難しくなり、約20年後には介護が必要な状態となることが多いです。

徐々に寝たきりになり、飲み込みも下手になる(嚥下障害)ため最後は、誤嚥性肺炎など合併症で亡くなることが多いですが、高齢で発症することもあり、ほぼ天寿を全うすることになります。

また、パーキンソン病でも約半数は進行すると認知機能障害を伴うようになり、幻覚や妄想も伴いやすくなります。こうなると抗パーキンソン病薬の副作用としての幻覚や妄想も出やすくなるため、なかなか治療薬を増やすことが難しくなり、治療に難渋することになります。

中にはパーキンソン症状が出る前から認知機能障害があつたり、パーキンソン症状がでてから1年以内に認知機能障害を伴うなど、運動症状よりも認知機能障害が主となる場合があります。これらは、びまん性レビー小体病と呼ばれ、パーキンソン病とは区別して認知症の一種と考えられています。

一方、パーキンソン症候群の方は、病初期から治療への反応が乏しく、約10年程度で寝たきりになり、やはり嚥下障害をきたすため、誤嚥性肺炎などの合併症で亡くなることが多いです。

中でも多系統萎縮症では声門開不全を高頻度で発症し、突然死の原因となるので注意が必要です。

これら進行期では経管栄養や気管切開、人工呼吸器の使用の選択などの検討が求められることとなります。

⑤ パーキンソン病(症候群)の進行度の胃ろうの適応

進行すると嚥下障害を生じるために、徐々に口から食べることが難しくなる(経口摂取困難)、他の病気と同様に、鼻から胃に通す管を用いて栄養をとる方法や、胃に直接穴をあけて管を通す(胃ろう)経管栄養といわれる手段をとるかどうかが、決断を迫られることとなります。

パーキンソン病の進行時期

進行すると嚥下障害を生じるために、徐々に口から食べることが難しくなる(経口摂取困難)、他の病気と同様に、鼻から胃に通す管を用いて栄養をとる方法や、胃に直接穴をあけて管を通す(胃ろう)経管栄養といわれる手段をとるかどうかが、決断を迫られることとなります。

パーキンソン病の進行時期

進行すると嚥下障害を生じるために、徐々に口から食べることが難しくなる(経口摂取困難)、他の病気と同様に、鼻から胃に通す管を用いて栄養をとる方法や、胃に直接穴をあけて管を通す(胃ろう)経管栄養といわれる手段をとるかどうかが、決断を迫られることとなります。

パーキンソン病の進行時期

表1 Hoehn-Yahr 重症度分類

0度	パーキンソニズムなし
1度	一側性パーキンソニズム
2度	両側性パーキンソニズム
3度	軽~中等度パーキンソニズム。 姿勢反射障害あり。 日常生活に介助不要
4度	高度障害を示すが、 歩行は介助なしにどうにか可能
5度	介助なしにはベッド又は車椅子生活

胃(経鼻経管)よりも胃ろうにしたほうが良いのではないかと選択を迫られることも多々あります。

最近、胃ろうという延命治療の一種と捉えて、拒否する方が増えてきました。しかし、このような胃ろうの適応は、あくまで、できるだけ自分自身でできることに、少しでも動けるようにするために必要な処置です。そう考へると胃ろうは少しでも生活の質・人生の質(QOL)をよくするための手段と捉えることができ、もっと人生を楽しんで過ごせる方法になるかもしれません。

胃ろうを造っても、さつぱら進行すると、薬が入っても以前のようには効かなくなる、もしくは副作用が問題になるということが起こってきます。このような状態の胃ろうは、延命治療としての処置に近づいていくこととなります。

このように、医療介入は単にどのように治療が行われるかということだけでなく、その結果生活がどのように変わると予測されるのか、ということを患者自身が理解して初めて判断できるものです。

特にパーキンソン病のように治療薬を内服できるかどうかが大きく症状に影響する場合には、誤解がないように胃ろうをとらえることが重要です。

OLYMPUS
Your Vision, Our Future

EndoTherapy.

Introducer変法をより身近な手技へ



販売名: イディアルシースPEGキット 医療機器番号: 22600BZX00409000

Introducer変法胃瘻造設キット イディアルシースPEGキット

1回の内視鏡挿入、経鼻ルートでも造設可能なIntroducer変法による患者様への更なる優しさ、シースを用いたボタン挿入での気腹や胃裂傷リスク軽減による安全性の向上に加え、IDEALシースPEGキットは簡便性の向上を目指した新しいIntroducer変法として誕生しました。

製造販売元/秋田住友ベーク株式会社 販売元/オリンパス株式会社

IDEAL

www.olympus.co.jp